

「の」ところ「まちあるき」がちよつとした
ブームで、「まちあるき本」もそこそこ出版
版されている。ただ、地形を手がかりにとか、
古地図を手にとってといったアプローチはある
ものの、都市プランナーの目で見たまちの読み
解きのおもしろさ観点からの本がほとんどない
ことにかねてより不満を感じていた。

そこで、出版を念頭に、まずは京都を対象に、
都市形成や地域開発の歴史を頭に入れて、じつ
くり歩いてみることを始めたら、これまでとは
異なった視点からまちの個性を垣間見ることが
でき、これが意外におもしろい。

たとえば、アーケード街。

これまででは、ともすると時代遅れの薄暗いシ
ャッター街の代表例のように思われてきたが、
じっくり歩いてみるといろんなことが見えてく
る。

そもそもアーケードという心齋橋筋のよう
に一本筋のものばかりを考えてしまうが、実際
はそれ以外のものも少なくない。L字（松山）
やY字（徳島）もあれば、S字（鹿児島）や十
文字（大分）、T字（高松）などである。なぜか
西日本に集中している（そもそもアーケード街
自体が西日本に多い）。

大半は歴史的な経緯からそのようなアーケー
ド街となっている。高松を例にとると、T字の
交点の所はかつての堀にかかる常盤橋のたもと
で、ここが各街道の起点となっていた。つまり

各 人 各 説

都市のおもしろさ

東京大学先端科学技術研究センター 所長

西村幸夫

Yukio Nishimura



三方向へ延びる街道筋の形がT字となって今に
至っているのである。

また、富山や神戸・元町、岡山、広島のように、
アーケードが江戸時代の街道筋というところ
もある。特に広島の本通りはもともと山陽
道で、賑わいの中心軸でもあったが、原爆でま
ち全体があとかたもなくなるほど破壊されてし
まったものが、戦後、アーケードを持つ中心商
店街として甦った顕著な例である。

通りの賑わいそのものが復元の慣性力を持っ
ていたかのようだ。

実際に歩いてみると、京都には割合元氣なア
ーケード街が多いことも分かる。アーケード街
もまだまだ捨てたものではないのだ。

考えてみると、ヨーロッパにははじめから街
区に造り込まれたギャラリーやパッサージュはあ
るものの、目抜き通りに覆いを掛けてあとづけ
で室内化するような発想はないのではないかと
すると、日本のアーケード街は繁華街の自助
努力の日本的な表現としての個性を持っている
と言える。それはまた、目抜き通りの歴史をも
表現している。

本コラムでは紹介しきれないが、こうした論
点は、アーケード街のみならず、駅前大通りが
どこを向いて通されているかなど、さまざま
都市の要素について見いだすことができる。

こんなことを考えながらまちあるきをするの
は、じつに楽しい。